

滝沢路女伝覚書抄

一 馬琴とお路

大著として知られる『南総里見八犬伝』九輯九六卷一八〇回、一〇六冊は、文化十一年(一八二四)初輯刊行以来、二十九年の歳月をかけて滝沢馬琴の四十八歳から七十六歳に至る、文字通り畢生の大作として名高い。執筆の終り近くに著者が失明し、亡き長男宗伯の嫁お路へ口述、筆記させて完結したという挿話も有名で、そのことは、あと書きにあたる「回外剩筆」で馬琴自らくわしく述べている。

吾孫興邦は、倘乳臭ある机心うせず。且武芸を好める本性なれば、憊る帮助になるべくもあらず、他が母は人並に、にじり書もすなれば、教て代写せばやと、やうやくに思ひかへしつ、第百七十七回の中、音音が大茂林浜にて、再生の段より代筆させて、一字毎に字を教へ、一句毎に仮名使を諭るに、婦人は普通の俗字だも、知るは稀にて、漢字雅言を知らず、仮名使てにをはだにも弁へず、偏傍すら心得ざるに、只言語をのみもて、教えて写する吾苦心は、

柴田 光彦

いふべうもあらず。況て教を承て写く者は、夢路を辿る心地して、困じて果はうち泣くめり。然而代写一枚に滿れば、読反させて、又教て傍訓を写するに、熟字を知らず、又句読をこゝろ得ねば、読時或は字を脱し、或はなき字を添て読めり。読すら輒からざるに、知らずこゝろ得ざる事を口授せられて、写く者の艱難を、思へばいと痛しさに、幾度か已ばやと思ひしを、又思ひかへして、
…(中略)…且慰めつゝ、一一巻代写させぬる程に、他もやうやくに熟て、苦心初の如くにはあらず。偏傍などは、稍わきまへ知りて、言を費すも、舌の疲るゝまでに至らず。…(中略)…文中に故事などを引用ひんと思ふに、原本に涉らざれば、暗記の失あらんことを恐れて、命じて其書を拿出させて読するに、漢籍は及ぶべくもあらず、仮名まじりの古書といへども、傍訓なきは得読ず、強て読すれば、駄舌侏離にて要をなさねば、援用ふべくもあらず。写することは教もすれど、読する事は吾見るにあらざれば、這十巻を果して、局を結ぶに至らんや。縫刺の技、薪炊の事などこそ他が職分なれ。文墨風流の事に代らせて、其要を倣さま

く欲するは、理なしとも理なしと、知りつゝも月を果ねて、今茲辛丑〔天保十二年、一八四一〕の秋八月廿日といふ日に、本伝第百八十勝回の下編附録目、諸將の成敗其尾を備にす、といふ結局大団円まで、稍稿じ果たりき。

「八大伝」は量的に見ると、岩波文庫の四ツ星、乃至三ツ星で一〇冊ある。その第十冊（第一七七回）三三頁の一〇行目の下、「と俱に前岸へ渡して、又定正を馬に乗て、那身も俱に一疋の、遣れる馬にうち跨つゝ、且隊の兵を相從せて、通宵路次をいそぎけり」から後半が、お路の筆記である。

休題再説。この日十二月八日の晩方に、烈婦音音は料らずも、那大茂林の澳邊にて、仁田山晋六武佐の、柴薪船を燬撃せし時、那身は蚤く大洋に、跳入りつゝ燬を免れて、浮つ沈つ洄ぐ程に、音音は武蔵の川畔にて、成長たる甲斐ありて、水戯自得の老婦にあなれば、約莫一里有餘なる、波瀾を凌ぎつ辛くして、大茂林濱に就しかど、大寒の日に潮水に没て、且風波に揉しかば、身は冷手脚疲勞果て、我にもあらず倣りにけん。品に携りつ身を起して、ゆくこと僅に兩三步、憶ず撲地と轉輾びて、开が儘息は絶にけり。総計では四百字詰原稿用紙で五百余枚、総振仮名付きである。

このところの稿本は幸いのこと、早稲田大学図書館に蔵されていて、展覧会にも出品、図録などにも掲載されていて、その苦心のさまを目の当たりに見ることが出来る。

現在の女子学生のうちで果してこの筆記に似た仕事に堪える者が幾人あるであろうか。これまで教室で接した限りの学生の多くはもつと易しい字を知らず、その文字を言葉で表現するすべに甚だ不慣れであり、殆ど不可能に近いと思われる。まことにその人を得ることの容

易でないことは、この一文を一寸のぞき見ただけでもすぐに理解しえよう。お路が文字通り全く教養のない、平仮名のにじり書きがやつの女性であったとしたならば、いかに努めてもこの口述筆記は不可能であることは一目了然であろう。

お路の筆蹟は、当初はおぼつかないながらも、やがて次第に馬琴のそれに似てきて、けなげに男性的な風格をさえ帯びてくる。

一方、馬琴の老妻お百の嫉妬が昂じて、家内騒動をおこし、それを馬琴が日記や家記に書き留めていたため、後世それが他人の眼にふれ、あたかも舅と嫁の間に秘密の事柄があったごとくにいわれ、その上に近世文学研究者仲間のいう「京伝蟲負の馬琴嫌い」の意識に影響されてか、何かと世間から後ろ指をさされたりもしている。

あるいは、「八大伝」の伏姫と八房をめぐるあやしく不思議な懷妊の物語のこととも掘み合わせて、人は一層好奇の眼差しで二人のことを噂し見たのかもしれない。

『小説神髓』で反馬琴論を展開した坪内逍遙は、少年期には強く馬

琴に心酔、感溺した人であるが、当時、戯作と劇などの歴史にかけては東京中でたった一人と噂されていた博識家の関根只誠と知合いで、

よく翁に戯作者達の伝記について質問したという。

逍遙二十六歳以後、只誠は既に七十歳の頃という。逍遙は路女の没した翌年の安政六年（一八五九）、只誠は文政八年（一八二五）の生まれで

三十五歳の年長であり、明治二十六年には六十九歳（数え年）で没しているから、逍遙の年代の記憶には若干のずれがあるようである。只誠

は若い時分に馬琴の妻百に遇ったことがあるという。

その只誠がある時、話が馬琴の晩年の事へ移った折、急に声を落して、一寸猫背になって「ありゃね、実はイモデンなんでしたよ」とや

や早口にいつて、じつと逍遙の顔を見たが、逍遙はイモデンの意味がとっさに浮んでこなかったたので、ただ「へい!」と要領を得ない返事をしたきりであつたので、拍子抜けがしたのか、話題がいつか他へ移ってしまったという。余程たつてから意味が明かになるとともに、話した人が人だけに、全くの根なしごとともみなしかねたが、只誠は既に故人となつて、その後二十余年を経て、『馬琴日記鈔』を読みその奇怪な風説は、「あゝこれだ! これが原^{もと}なのだろう」と思わず机を叩いたという。

逍遙が読んだ記事というのは、天保九年四月二十日、「この節、お百事に付、娘ども苦勞いたし、かれは心配、皆是、我不徳の故にて、時の不祥かくの如し」とか、閏四月十日の「お百、又、予に對して怨言をのべ、捨身すべしなど云。予、徐にこれを論して、七年以来吾家治らざるは、畢竟、吾不徳の致す處、人を怨むるによしなし。夫婦七十余歳に至れば、余命幾かあるべき」とあるところである。また五月十六日には「右内乱にて、今日、予、著述休筆、諸事廢業也。事皆、吾不徳の致す所、人を怨るの心なし。その罪、吾一人にあり。おそるべし。つゝしむべし」と書いている。

幸田露伴はこの段を評して、「内乱の二字下し得て妙、七十余歳にして何事をかぐどづきにけむ、老來つて獅子愈々神威あり、曲亭翁の迷惑さこそと思ひやらる。吾が不徳の致す所として、反求諸己、翁の老実なるを見る」という。

近年では、国立劇場で「八大伝」が上演された際のパンフレットに、故人となつた国文学界の二人の老碩学、久松潜一・麻生磯次両博士の対談で、久松氏の「おみちと関係があつたとか……」というのを受けて、麻生氏は「いろいろ噂はありましたが、はつきりした証拠は、お

みちの日記を調べないとね。なにか、いい寄られて困るようなことがあつたと書いているとか……。ああいう堅物は、えてしてそういうことになり勝ちだといえますからね(笑)」などといっている。

その後水野稔氏は、神田にある天理ギャラリーで開催された馬琴の記念講演⁽⁷⁾でこの話を紹介し、控室の話から頼原退蔵氏も本気でいつていた旨を伝え、お路の日記というものを諸先生が知らなかったのではないか。馬琴の日記を見ても、伴の宗伯やお路の日記を見ても、滝沢家の日記という立場で書いていて、個人の人の見せない日記では決してない旨をいい、馬琴の日記や『吾仏乃記』を引かれてそのことを否定される話をされた。しかしすでに関東関西の大家にして然り、また講演の聴衆よりも歌舞伎のパンフレットを読む観客の方が遙かに多い。重出の失礼を顧みず筆をとる所以である。

子孫の滝沢家も噂を恐れてか、万一のことを考慮してか、家に残っていたお路筆録の日記の公開をながく憚つていたため、人々の憶測もあるいはさらに助長されたのかも知れない。

既に焼失したり、佚亡したりした馬琴の日記を補う資料に『吾仏乃記』⁽⁷⁾という滝沢の家記を記した五巻の記録がある。第一巻第一冊は文政五年(一八二二)に馬琴自ら筆をとつて書いたもので、その内容ははやくに知られていたが、全貌の知られたのは近年になってからであり、二巻以降は、八大伝の完結した天保十三年(一八四二)の暮から、馬琴がお路に口述して筆受させたもので、これにはよりくわしい事情が記されている。天理図書館がこの書を入手したのは昭和四十一年(一九六六)七月の由である。

その巻三、百五六、お百「復正次の家に同居の情由」。天保九年(一八三八)、馬琴七十二歳、妻百七十五歳の時、

老婆お百、又癩疾発りて、愚婦おみちと同居せまく欲せず、元飯田町なる旧宅に在りておさきに養はれんといひしを、吾理を尽して諫れども従はず。遂に駕籠に乗りて、二女お祐の婿四谷伝馬町

新宅丁目なる田辺久右衛門の家にゆきぬ。異日、お咲来てこの義を談ず。

馬琴は、養育料として月一分、年三両、着る物の調達もするというのをおさきは喜ばず、前の時のように五兩一分を要求した。老いた身に散財多く、三両も容易ではない。たとい養育料を払わずとも他に身寄りのない母ではないか、漸くにおさきは承服して、四谷から百を飯田町へ連れて帰った。あとで聞くと、お百の争いの元は四谷の婿の讒言に依る。「久右衛門は本性愚にして、反て便俟也。こゝをもて、お百が行て止宿しぬる折、己人相を知れりとて、お路を誣て、岳母の機に入らまく」したのである。先にも成功したら隠居所を造って母を養うといったのに、お百が喜んで逗留が永くなると、お祐は錢がないとつぶやき、久右衛門も困って飯田町へ行き、おさきに頼んで引きとらせたことが度々あったという。お百はそれを悟らず、三人の婿のうち久右衛門に勝る者はないと親愛していた。「女子小人の生さかしらなる、いかにともすべからず」、「よしや何ともいはいへ、吾におゐて争ふ所なし」と馬琴は口舌に騒がず、積氷の解ける時を待つのみと、「独り」嘆息に堪すかし」という。

このような家族間の争いは、今日なお一層、嫁、姑・小舅・小姑の間に熾烈かつ切実な問題であり、さらに呆けが加われば一層悲惨である。しかし近頃では嫁の姑いじめに、老婆が怯えることが多いという。事は三年前に宗伯が親に先立って逝った時に始まる。

二 馬琴の釈明

病弱の宗伯は、天保六年（一八三五）五月八日に三十八歳で死んだが、この年の日記は今伝わらない。残された妻お路三十歳、長男太郎八歳、長女つぎ六歳、二女さち三歳の三人を抱えている。なお、馬琴の右眼は前年来すでに見えなくなっている。

件の『吾仏乃記』卷三にはつぎのような記載がある。

興継が世を去りし後、一日老婆お百、解「馬琴」に囁きていふやう。媳婦お路は年尚少かり。おさちを添て離縁し給へ。然る時は、御身と妾と、太郎を守り育てるに、炊婦一人あらば事足りて、なかなか後易かるべしと。

馬琴はこれを聞いて、

其主張故なきにあらねど、吾もおん身も年既に七十に及べり。縱余命五、六年ありとも、太郎は尚十五歳にも至るべからず。他不幸にして早く父を喪ひしに、又祖父母のこゝろもて母をさへあらせずなりせば、そは大不慈といひつべし。且、お路は、贅居「やもめずまい」して兒子を守育まく欲す。又其父母土岐村夫妻も情願離別の意なし。然るを今慈に是等の一義を發語せば、みづから家を乱すに似たり。無用々々、（百卅三）

と諫めたところ、お百は敢て従わずに、馬琴が嫁を愛するために、言葉をかまえるとはかりに猜疑心をおこして恨み、同居したくないと、ついに飯田町の旧宅に行つて、婿の清右衛門・おさき夫妻と一緒に住み、度々呼んでも帰らない。

このため、その年十一月上旬に、馬琴の妹のお秀とお菊らがお百を

諫めたが、清右衛門・おさき夫妻、久右衛門・お祐夫妻まで、小人女子の臆断で、母の言葉に理ありとして、燃える薪に油を注ぎ、お百はますます帰らぬので、馬琴はやむなく飯田町に同居することを許し、一年に母の養料として、金五兩一分をやることをきめた。

馬琴が隠居してから、毎年清右衛門から受け取っていた金五兩一分―飯田町で売っていた売薬の売上げと、上家賃二十兩のうちの五兩―をそのまま母の養料にして、馬琴は受け取らずに、清右衛門夫妻の取り分とした。

この他、お百の要求のままに、夏冬の衣類・調度から、お百の養父母の遺品といって、昔宗伯にやったものも、みな揃えて清右衛門に渡してやった。

末娘のおくわ等もまた父を非として兄嫁を憎んだ。これは馬琴にとつての小厄で、群小の怒りに遇った。それを他人の馬琴の心中を知らぬ者は、一言も争わずに老婆の思う通りに任せたのを、疑い、かつ誣った。

それは馬琴の心を知らぬためであるから、問題にするにおよばない。老婆の惑いは、孫を思うためで、この他に特別の恨みはない。その上、自分とは四十数年来の夫婦で、今は彼女には親類もなく、帰すべき家もない。古語に「糟糠の妻は堂を降さず」(十八史略)という。それを今怒りに乗じて、自らこれを破ることがあれば、宗伯の今はの際に答えたことが無駄となり、太郎等のためにならぬ。ただここは愚に徹し、たえ忍ぶべきであると考えて少しも争わず、老婆にいいたいことをいわせて、耳を塞いでいるうちに、翌天保七年(一八三六)の秋八月から老婆の猜疑心も自然に解けて、神田の家に帰ろうといった。

馬琴はさらにいう。

三人酒を喫して、酔たる者二人溺るる時は、其酔はざる老人、是を救ふべし。三人共に酔ふ時は、敢て是を救ふに由なし。狂人の走るは素より其所也。不狂人も共に走れば、狂人ならざる者なし。吾心石にあらず。しかれども動かすべからず。吾心鏡にあらず。しかれども穢すべからず。動かされず、穢されず、自若してありける程に、久厄終に解けて志を行うことを得たり。

吾れ、其恥辱を思はずして、この記にしも及べるは、彼を非として吾が才に誇るにあらず。もて子孫の箴めとなすのみ。太郎等、吾老後の苦勞を知る日あらば、又よく忍の一字を守るべし。

と。

馬琴の口述を、先年馬琴が書き留めた「雑記」を元に、お路は時折文字を尋ね、確めながらそのままに書き留めて行く。その内容は自らと舅との間を姑に疑われたことにもふれている。その条りにおよぶごとに胸塞がる思いであったことであろう。

また第四冊、家説四の「余三」にはつぎのごとく書かれている。

故児が七七の忌の果し比、長女おさが薦めによつて、老婆お百を保養の為に、元飯田町なる旧宅に遣して、逗留させしより猜疑起りしを、解「馬琴」いまだ悟らず。其後、老婆が媳婦「お路」を里へ還し給へとて薦めしに、解其不可を説論して、許さざりければ、疑心ますます暗鬼を生じて、好言美語も甲斐なきまでに至れり。こははじめ解が謹慎等閑にて、遠慮なかりし昨非也。李下の冠、瓜田の履、用心せずばあるべからず。

尔れどもこの時、解は六十九歳、老婆は七十二歳也。且、独子を失ひたる、哀感の涙いまだ乾かざる折なるに、さしも男女の間にあて、是等の猜疑あるべしとは、思ひがけなきまがつみ(禍鬼)

也。こは吾厄也と思ひしかば、いひたきまゝの事をいはせて、耳を塞ぎて争はず、只堪忍を宗として、三、四年を経ぬる程に、波風おのづから鎮りて、家内安全の時を得たり。

(中略) 人の父たる者、一旦の怒に乗じて、その子の母を去時は、何をもて慈父とせん。世間億兆の婦女子あり。妻を娶るは幾遍も易かるべし。其子たる者、実母あらずなりては、二たび是を得べからず。

妻子の罪、竊盜淫奔ならざる者、怨言不遜を罪として、怒て是を去る時は、百妻も尚足らざるべし、と思ひし故に無異なりき。

こはいはでもの事ながら、児孫、解が愚に倣ふて、よくこの忍字を守りなば、必や裨益あるべし。(一忍耐治^忍百魔^事)

これは馬琴が生涯を顧みて、「五不幸、三厄」ありとして、お百の疑念を三厄の終りにすえての自注である。馬琴は自分への疑惑を繰り返し釈明し、ひたすら「忍の一字を守るべし」という。そしてお路がそれを筆録しているのであるが、これは馬琴のお路への弁明と詫びの言葉でもあったろう。二人にとってなお古傷を逆撫するような辛い思い出であったに違いない。

三 姑の死

宗伯没後のことを略述すれば、翌天保七年五月、一周忌の法要を終えたあと、七月に至り孫太郎のために四谷信濃殿坂に持筒同心の御家人株を買い求めた。その費用調達のために元来好まぬ古稀の書画会も開き、蔵書を処分し、神田明神下の家も売った。太郎が幼少のために母方筋の者を仮養子にして、滝沢二郎と名乗らせて代番とし、十一月

に同心屋敷へ移転はしたものの、そこはひどい荒家になっていたので普請をせねばならず、太郎は翌年の春までお路の里に預けなければならなかった。

原本は焼失してほんの僅かしが抄録されていない天保八年三月十五日の日記にはつぎのごとく認めてあった。

去冬十一月転宅以来、お路、殊に立はたらき、実に寸暇なし。彼なくばあるべからず。二郎は勤あり。且、不実にて、あれどもなきが如し。

また『吾仏乃記』は十一月下旬より十二月にかけて雪の度々降る中で、物置小屋に竈を置いての煮炊きの様を叙して、

今茲は寒威いと劇しくて、硯の水すら氷りぬる。且暮の艱苦奉ていふべくもあらず。お路が炊きて母屋へ遣す飯櫃を凍に沁りて泥中へ放^か下ししもこの折の事也。其他は是にて察すべし。(家説第三、百四三、敗屋修復の二、井に移徙の略記)

と記す。

天保八年(一八三七)七月、飯田町の長女おさきの婿、清右衛門が五十一歳で死去した。翌九年三月、前述のお百の痼疾再発があり、この頃から馬琴の左眼のかすみが進み、細字を書くのに不便となってくる。お路の里の父土岐村元立が病気で、看病にやったが五月に死去した。閏四月にはおさきに再び婿をとって、同じく清右衛門を名乗らせる。

この年の九月、お祐の婿久右衛門が横領の罪で仮牢に入れられる事件がおこり、家具、調度を売払って弁済、漸く出牢することができた。もとより母お百の衣類も質入れしていた。やがて久右衛門は妻子を残して出奔、お祐母子三人は、飯田町の後の清右衛門夫妻の所へ引きとられたが、その後信濃町の馬琴がよびとった。お祐は病氣となって十

二月まで寝込んでしまった。

天保十年（一八三九）三月、お祐は七歳の鎮吉を残して家を出たが、お路は鎮吉を養育すること、わが子と区別することがなかったという。翌年お祐が、久右衛門と同居していることを伝え聞いた馬琴は、清右衛門に命じて親の元へ返してやる。しかし、久右衛門は五月に再び事件をおこし、裁判沙汰となり、公事八ヶ月におよんだという。馬琴はこのことを記して、

この時にしも老婆お百は、無名「明丸」の酔稍やく酔めて、久右衛門、おゆう等の不義不幸を憎むる事大かたならず。お祐が町奉行所へ召されて参る折、清右衛門が許へ来ぬる毎に、母は面を背けてものいはず、反ておみちをたのもしく思ふ心つきたらんと云、お咲が噂に吾聞知りぬ。然ればこそあれ、吾始より、彼非理の口舌に争はず、徐に厚氷の解るを俟たる甲斐あるこそ本意なりけれ。（家説第三、百六三、田辺久右衛門が余殃の願末）

と結んでいる。

一方、馬琴の眼の方は如何かというに、十年の九月には、お路にいつけて自作の『新編金瓶梅』七集一、二の写本を読ませて聞いた。「衰眼にて細字の写本見えわかざる故也」と日記には記されている。やがてその後「八大伝」の板下写本も読ませるようになる。

お路が手紙の代筆をはじめたのは、翌天保十一年六月六日の松坂の小津桂窓宛てのものからようで、

衰眼弥かすみ、此節ハ何分筆硯不如意ニ付、休筆ニて保養致罷在候。此故に、ふつゝかなる代筆ヲ以得御意候間、行届兼、失礼御用捨成被下可候。

とあり、日付、署名、宛名および尚々書は自筆で認めている。

お路は、こうして原稿、板下写本を読み上げ、誤写訂正の手伝いはじまり、日記を代筆し—恐らく天保十一年三月十九日以降—さらに手紙の代筆を重ねて、翌天保十二年正月下旬よりようやく「八大伝」の原稿代筆に取りくむことになる。

馬琴とお路との間を疑がって家を飛び出したお百は、天保十一年九月まで飯田町の家にしたが、十月は飯田町に火事があるという浮説が流れたため、おさきに送られて駕籠で信濃町の馬琴の許へ帰った。十月二日、据風呂を湧かして入浴、湯あたりから腰が立たなくなり、お路の介抱を受けた。十一月に代人として立てた二郎を引かせて、いよいよ太郎出仕の願いを出すことにし、お路はその衣裳裁縫のため、看病の暇をえず、八日の午後、お百を駕籠に乗せて、また飯田町の旧宅に送り届けた。

翌天保十二年正月下旬より、お路は「八大伝」の代筆に取りかかった。この年は正月に聞があり、翌二月七日、お百は朝早くから高軒をかき、そのまま午後未の刻（二時頃）に息を引きとった。享年七十八歳であった。九日、小石川茗荷谷の深光寺に葬る。

まれに見つまれに問はれてありし日に今こそをしめつひのわかれ路

三月下旬には、馬琴の眼は殆ど僅かに昼夜を弁ずるのみとなっていた。

五月八日、宗伯琴嶺の七回忌。

子は仏親は火宅をいまだいでず老少不定生死順逆など追悼歌九首を手向けた。

六月、馬琴は深光寺にお百の墓石を建立、自らの戒名も併せ刻した。

瀧澤 氏	著作堂隱譽蓑笠居士
墓表	黙譽靜舟到岸大姉 <small>天保十二年 春二月七日</small>

笠石の破風形の正面に八本矢車の家紋、台石に乾坤一草亭の印を彫出し、碑側には五行に、

著作堂老翁江戸人源姓瀧澤氏名解字瑣吉一字篁民」號曲亭所著雜書國字小説供大小二百八十餘部皆行」于世令嗣興繼先死嫡孫興邦為嗣翁享年
「黙譽會田氏名百著作堂渾家也所生有一男

三女没年」七十八歳

と自らの名も一緒に刻んだ。書は方外の友旗本三千石、石川左金吾量翠の筆になるが、量翠は五月から脚氣を患い、その六月十六日、三十五歳の若さで墓の建ったのを見ることがなくして死去した。

建墓の費用は、伊勢松阪の知友殿村篠斎を通じて処分した蔵書の値段七両三分で賄った。

八大伝の最終の刊行、九輯下帙下、結局四卷五冊が売り出されたのは、その翌年、すなわち天保十三年（一八四二）二月九日であったという。馬琴七十六歳、お路三十七歳の時であった。

四 馬琴と太郎の死

八大伝の完結より六年後の嘉永元年（一八四八）十一月六日、曉方午前四時頃、馬琴は八十二歳をもって永眠した。その間にお路が筆受して出版した著書に、『新編金瓶梅』・『新局玉石童子訓』・『女郎花五色石台』などがある。

空白であった深光寺の墓石の正面には「嘉永元戌申年／冬十一月六日」、碑側に「八十二」と没年と享年が刻みこまれた。

馬琴終焉の嘉永元年四月より翌二年五月までの日記一冊が、岐阜市の円徳寺に蔵されていることがわかったのはごく近年で、あたかも中央公論社刊行の馬琴日記編集進行中の昭和四十六年のことであり、暉峻康隆先生と筆者と岐阜に赴き、撮影して追補することができた。

この日記の四月から八月九日までがお路の筆であり、十日より十八日まで、宗伯の忘れ形見太郎の筆になる。この間、お路は腹痛、発熱して病臥していた。また太郎もその頃から脚が腫れて床につきがちであった。

お路の日記の記述があくまで馬琴の代筆の形で続けられていることは、馬琴のことを「吾等」と一人称で書いていることとわかる。十月の末二十七日以後十二月二十九日に至る太郎の執筆は、祖父馬琴を「嚴君」または「家翁」と記し、自らを「我等」、お路を「家母君」と書く。先にいう両大家のいうお路の日記というものが、これ以後のものであるが、二人のいうような記述がこれにありえよう筈がない。そして馬琴の没後も、お路、太郎と交替に日記をつけあっている。ともに健康の勝れぬ時の代筆である。

この日記の表紙の見返しには、お路が朱書きしている。

此日記、蓑笠様御遠行の一条、并ニ太郎事、琴鶴居士手跡も此内に有之候間、おさち等別而大切ニ致、夏毎ニむしを払ひうしなへぬやう心掛候事、くれ／＼も龜末にすべからず。

と書かれている。おさちは太郎の妹である。このようなお路の格別の注意にもかかわらず、心ない一族の者の手により瀧沢家から借り出され、さらに借金の抵当にされ、やがてその遺族の菩提寺に納められて

今日に至った。東京帝国大学図書館へ流れた多くの日記は大正震災によつて焼失したから、それはあるいは怪我の功名とでもいうべき措置であつたといえなくもない。

嘉永二年（一八四九）六月以降、安政五年（一八五八）十二月までのいわゆる「路女日記」一〇冊は、滝沢家から奈良県の天理図書館に寄託されている。木村三四吾氏は、先頃よりこの路女日記の翻字紹介を始められたが、今日、馬琴学の頭梁ともいうべき氏の描く「滝沢路女」^(一四)観はつぎのごとくである。

日記にはある人達が想像したような形跡の勿論あろうはずもなく、読むにつれ、お路なる一人の女性への理解と好もしさは追々に深まるばかりだった。馬琴なき跡、一家一門を取りしきる家刀自としての自負、貫録、世事さばきの見事さには目を見はるほどで、元来こうしたこと仕こなし得る型の女性だったのである。作家杉本苑子近作『滝沢馬琴伝』のお路解釈をみるにつけても、馬琴外伝の一つとしてわが路女伝を草してみようか、…（中略）…などふと思つたこともあつた。…（中略）…一応裕福で万事おおどかな藩医の子女として屈託なく育ち、当時の習俗に従い行儀見習いのための奥勤めから、ただ一度の見合いだけで、滝沢の家に嫁し、既に陰湿半病の兆さえあつた宗伯の妻として、ジャジャ馬の姑、名負うての気難し屋の舅といったそれぞれに強烈な個性の陰に、本来の性格もいじけかくされてしまったのかもしれない。それが次第に馬琴に信頼され、親愛され、やがてこの老大作家の文字通り片腕となるまでに成長していく。そして馬琴亡き跡―路女日記はそれから始まる。

馬琴が、老残の最後の力をふりしぼつて世に出そうとした孫の太郎

は、天保十一年正月、十三歳ながら人並より大きく見えるところから前髪を剃らせて元服、與邦と名乗り、十七歳と申し立て、代番の二郎へは功勞金五兩を払つて退かせ、十二月より見習番として出仕した。

十三年四月には、將軍の日光参詣に供奉、翌年には副書役から平番になったが、弘化三年、十九歳の冬、風邪のあと手足が痛み歩行不自由となり、祖父馬琴の死去翌年の嘉永二年十月九日にあとを追うように死去した。

母の記す当日の日記。^(一五)

今朝五ッ時過「八時頃」ハ太郎煩悶甚敷、母、悌三郎、おさち、色々手当致し候へども、其かひなく終に巳ノ上刻「十時頃」息絶たり。時に享年廿二歳也。其ハ家内愁傷大かたならず、混雜いふべくもあらず。

十一日葬儀のあと、

廿二日迄人々入替立替り、其外人々初七日の仏参、并ニ逮夜贈せる客来等の事は右ニ記すごとく、筆とることの厭ハしく存じ候故ニ、廿二日迄ハ不知、併に数日拾置候も、蓑笠様「馬琴」是迄被遊候御心中ニ背候も、不本意ニ存候ニ付、思かへして、又廿二日より涙ながらに記すもの左之如し。

と。十一月六日は馬琴の一周忌であり、また太郎の四七日にもあたる。

今日琴鶴四七日、祖、孫打続きかゝる歎もあることやと一入うれひやる方もなく、しばし涙にむせかへり候間、事察すべし。

その年の大晦日。

今日、昼節一汁二菜、膾、母女二人祝食し夕方納茶、都て先例の如く祝納ム。祝なからも母女二人の外敢人なし。心苦しき事限なし。明けて嘉永三年（一八五〇）、残されたお路は四十五歳、さちは十八

歳を迎えた。早くに飯田町へ養女にやっただつぎは三つ上の二十一歳である。

お路はやがて知人の子女に踊や清元、三味線を教へはじめる。馬琴の日記にはお路の遊芸のことは無いが、『吾仏の記』巻五には、

童女たりし時、蒙師に就きて手習す。又母命じて絃歌を学ばしむ。

本性三絃を好まず、棄て又舞踏を学ばしむ。因て姉と共に松平遠江守殿〔尾崎四万石〕の奥方に給事、数年にして身の暇を給はりて、大城の部屋方に給事す。

とあり、大名の奥方から大奥にも仕えたことが知られる。またさちの娘で、飯田町の弥兵衛（清右衛門）、つぎ夫妻の養女となつた橘女（十六）の「思ひ出の記」には、「私は祖母おみちさんの顔は知らないが、母の話と例の中坂のお婆さん「お路によく似た人という」を見て、色の白い小柄なきれいな人だと思ふ。祖母おみちさんは、土岐村といふ医者（一六）の娘で、琴嶺に嫁入りする前は、御本丸に御狂言師としてつとめて居た。踊も三味線も達者であつた。焼ける前は、踊の衣裳や琴・三味線・鼓など、祖母の使つたものの、雛人形などもあつた。兎も角も、派手な家から地味な家の人となつて、よくも辛棒したものだと思ふ」と書いている。

またお路の日記にはつぎのような記事が見える。

○明九日、松岡氏ニ狂言茶はん有之候ニ付、各々顯ニ依、稽古の為被参候間、各々ニ教遣ス。（正月八日）

○深田およし殿被参。右は清元雨乞小町習寛度由、ひたすら所望ニ付、無抛其意ニ任教遣ス。（同十二日）

○〔梅村〕直記殿内義、女おさだ同道ニて来。右は廿四日親類方へ被参、おさだへ雨乞小町おどらせ候ニ付、さみせん不存申候故、右雨乞小町の三味線を覚へ度よしニて被参、則教遣ス。（同二十日）

また一方では後ろ楯を失つた未亡人のところへは、お為ごかしをいながら酒醺を帯びた者も押しかけてくる。

夜ニ入、三嶋氏、坂本氏被参、雑談中加藤氏酩酊のやう子ニて被参。中西氏ハ酒肴被申付、此方へ持参せらる。何れも酒興の上とハ申乍、（中略）：主人無之、女子暮なる所に推参せられ候ハ、甚以疎忽の至り、非礼甚だ迷惑限りなし。（同二十五日）

怒りながらもやむなく客持参の酒を人々にすすめるお路であつた。滝沢家存続のためにはおさちに早く婿をとらなければならぬ。縁談があれば、近くの大日如来や牛頭天王で吉凶の圖を引いたりもする。

五 さちの結婚と離婚

三月二十日、日本橋（一七）正町の松平阿波守医師七役、殿木竜裕の三男順蔵が入夫、太郎の跡を継ぐ手続きを済ませ、名も小太郎と改めた。しかし、隣家の林猪之助内儀からの口を断つたためか、難儀が起ころ。それまで親しくしていただけに、一旦不仲になると却って恐ろしい。

四月十八日、去ル廿日後、林内義立腹之余り此方を罵り候事度、殊ニ今晚は窓下（一八）参り讒言已時なく、并ニ上之人（一九）ニ惡口被致候事、実ニ潜難処、かねて蓑笠様御教訓有之候ニ付、そを守り候ニ付、此方ニてハ一言半句も不申出、実ニ歎息（二〇）の事也。

いやがらせはさらにエスカレートし、子供をつかつて垣根にのぼつて叫ばせるだけでなく、「此方へ参り候人々には堅く止めて、必らず滝沢へは行くべからず」といい、さらに、

此方ニて山本氏并ニ近辺の人々を譏候ニ付、一同立腹被致候由ニて、色々おさち（二一）被申。然れども手前ニて人々を譏候心少も無之

く候得共、右は林内義之讒言成るべし。去四月下旬跡かくの如し。笑ふべし、憎むべし。(五月十日)

○小太郎、昨夕方立腹致居候様子也。何の故なるを知らず、

…(中略)…おさち、小太郎ニ立腹之趣承り候所、此方何分人出入多く、中々ニ以続不申、右ニ付日本橋殿木氏五婦り度由、母五申具候様、申之候由、おさち告之。何分夜中せん方なし。明朝兎も角も可致存、其儘枕ニ就く。(五月十六日)

七月以後はおさちと床を一つにしなくなり、何かという顔色を変え、おさちに向つては、「此家ハ我小太郎の家也。出ていね杯」(七月七日)から、「おさち事ハ死ねバよろしく、どふかな致死ぬようニと存候。いざと申せば彼等追出しやらん杯被申候間、油断すべからずと被申候由、おさち帰之後、告之。誠ニ憎むべき白物也」(九月十一日)といった状態であり、次第に騒ぎは大きくなるばかりで、上役や、組頭の佐々木近江守へ頼んでやるという者もいた。そんな取り込みの中でも断わるお路のところへ娘を入門させたいと申し出る人もあった。

やがて太郎の一周忌、馬琴の三回忌のあと、ついに離婚となり、小太郎よりは今日いうところの慰謝料三十両を要求され、事は翌嘉永四年(一八五二)にもつれこんだ。例の林の内儀は、此方の悪口を散々に小太郎に吹きこみ、「なき事もあるが如く」に讒言、「小太郎の罵り狂うことま事に嘆息かぎりなき」有様である。馬琴とお路の醜聞もこういう「林悪婆の口より出た事」であつたかもしれない。

林の内儀は窓下にては連日のように悪口雑言を吐く。「此方母女、畜類の如く申し、遺恨遣方もなき次第也」(二月三十日)

馬琴の末娘くわの養子、宇都宮藩士渥見祖太郎があれこれと動き、二月に入つて数人の者を立合に、小太郎持参の衣類、諸道具、此方か

らやった品々を改め、書付と引合せ、荷物を持え置き、証文印鑑を請取り、金十六両、小太郎土産金七両、勤金一両、大小引替金メて二十四両を小太郎へ渡した。

そんな最中の二月八日に飯田町の後の清右衛門正次が五十歳で死去、九日に葬儀が行われた。

四月三日、四谷菱屋横町より出火、南寺町へ火が移り東西へ延焼、およそ二十五町四方という。諸道具・家書・仏具等二葛菴、その他を久野邸内の加藤家へ預けた。また荷物を竹藪へ運び避難する。永井信濃守邸へも飛火、もはや焼落ちたかと覚悟して帰宅したところ、幸いにも助かった。

十一日、幼くして飯田町へ養女にやつたおつぎの婚礼が行われた。婿の名は弥兵衛、日本橋の白木屋の手代で、盆栽好きの優しい夫であつたという。四代清右衛門伯嘉を名乗り、二人の男子を設けたが何れも夭折した。

この年五月八日、お路の亡夫宗伯、琴嶺居士の十七回忌、また太郎、琴鶴居士三回忌の法要をいとなむ。漸くに離婚をしたおさちも再び縁談ととのい、六月二十八日、麻布賢宗寺隠居の縁辺(電土町榎本彦三郎と兄弟か)吉之助が跡をつぐ。

滝沢家の日記は、その後はこの吉之助によって認められるべきであつたが、その後もお路自身でつづけている。

吉之助の出仕は、あれこれの末、九月になってからであつたが、かねて遺恨を抱いている山本半右衛門は、番所内で滝沢の家を罵ること甚しく、「或は放蕩、或は悪者と唱、人を譏り、不義にて吉之助を貰受候杯」といい、その上お路の姉の夫山田宗之助から、渥見祖太郎までも譏り、「甚しき事かぞへあぐるにいとまあらず」と、太郎と親し

かった松村儀助が告げる。お路は怒りながらも「心術の愚なる、女々しく人々を譏り候事、妬氣偏執甚しく烏滸のしれもの也」(九月二十九日)と書留めて^(一九)いる。

正式に吉之助が出仕を命じられたのは、十月十六日であった。先夫小太郎との問題がながく尾を引いたからであらうか。

越えて嘉永五年(一八五二)正月十六日、訪ねてきた書肆丁子屋平兵衛から、合巻『仮名読八大伝』一六編を贈られ、一七編の書抜きを依頼された。初編より一六編までは二世為永春水の作である。以後、嘉永六年より安政五年の二七編までは鳳簫庵曲亭琴童、すなわちお路の作となる。お路はこの協力者に気心の知れている松村儀助を選んだ。画割りの相談から、序文抄録等、殆ど代作といってよいかと思われる記事もあるが、お路自身も筆をとっている。

かなよみ八大伝、昼後より抄録、わづか荅丁弱写之。(正月二十

二日)

抄録した稿本は、十六日に吉之助が丁子屋へ持参、抄録料も二十四日にたまたま丁子屋の前を通った吉之助を呼び止めた手代忠七から金三百疋渡された。そして松村へは翌日百疋を贈った。その後の日記では、稿料を金三分、松村へは金一分と書かれている。

翌る嘉永六年(一八五三)二月六日、長男倉太郎が生まれた。また三月十二日に飯田町のおつぎも男の子を生んだが、十四日に祝いに行った吉之助が抱いても動かぬので、不審に思いながらまた寝かせたあと、おつぎが抱き上げて驚き、大騒ぎとなり医者に走ったが、「既にはや先刻こと切れ候ニ付、療治不叶、一同愁傷限りな^(二〇)」^(二〇)かった。戒名を光円童子という。

不幸は重なるもので、吉之助の側も、賢宗寺の方丈は病氣引きもり

というので見舞ってみると、実は「犯せる罪ありて、当(五)日召被捕れ、来五日八丈島遠島ニ相成候由也」(三月二十五日)という。異国船が浦賀に上陸、世相あわただし最中、近隣の旗本知久屋敷では、旧冬よりのお家騒動から家臣十人余りも亡命したという。六月二十二日、將軍家慶逝去。「誠に恐れ入る事かぎりなし」。

七月に入って、吉之助は竜土町の榎本へ通って版木彫りの内職の稽古をはじめ。同心仲間の婦人達は去秋より足袋仕立ての内職をしていて、滝沢家でも例外ではない。

翌嘉永七(安政元)年、正月にはアメリカ船、二月にはイギリス船が来る。二月四日より飯田町のおつぎが持病の息切れで臥せているところへ、養母のおさき(馬琴の長女)の具合も悪い。夫の弥兵衛は上野のお大師様へお百度を踏みに日参し、お路も看病に行って泊ったりするが、五月五日には自らも不快、胸痛が起き、金毘羅様のお札を頂戴しても験がなく、「程なく吐し、よりかゝり候て其夜を明^(二二)」^(二二)かすという状態で、医師坂本順庵の来診によれば、持病の瘵に、時候当り、心痛もあるという。月末には起出して義姉を見舞ったりもするが、再び胸痛、全身に発疹し、かゆき事甚しく、下痢をしたり吐いたりする。時候当りの上に疲労からくる心身症も加わったと思われる。そんな中でも日記をつけることを欠かさずに、「おさき、吉之助看病ス。鶴乱成べし。終夜発熱、惣身癢く、終夜不睡也」(六月十七日)と書いている。

六月十八日

自、今日ハ順快ニ候得ども終日平臥ス。

八月二日

自、晦日より胸痛致し、氣分塞ぎ、食事平日ならず、しかれども枕ニ不就。

吉之助は浄瑠璃「天下茶屋」の版木を彫っている。このような時で

も『仮名読八犬伝』の校正刷りが出、吉之助に松村へ持って行かせたが、校合せずに持ち帰り、お路自身で校正する。

九月四日、丁子屋より『仮名読八犬伝』発売、製本二部を贈られ、「尚亦、廿三篇稿本抄録致し呉れ候様申来ル。承知之趣申遣ス」。

十一月四日、地震あり余程振う。いわゆる安政の大地震である。五日は馬琴七回忌の連夜。一汁四菜の膳部を供え、翌日一同で深光寺へ参詣した。出がけに下掃除鉄五郎より納干大根二百本持参、受取る。例年納める下肥えの料である。

十二月二十一日、馬琴の長女飯田町のおさき死去。享年六十一歳。戒名を廓蒼然生信女という。

六 二人の婿

安政二年（一八五五）は倉太郎病難の年であるが、十二月二日には二男力次郎が生まれた。お路は日記の裏表紙につぎのごとく朱書している。

此日記は倉太郎脾痛を病煩ひし年の日記なれば、倉太郎成人の後見せて、親の看病苦心を知らしむべし。倉太郎孝心あらば父母を尤大切ニ存、孝養を尽すべき也。若是をしも思はずバ、人にして人にあらざる也。且、力次郎誕生年の日記なれば、失ぬやう心ニ可被掛者也。路囀記ス。^(二三)

こえて安政三年二月に入っておさちは左足に痛みを覚え歩行出来ず、半起半臥の体となり、門番嘉七の療治を受けた。

また吉之助とおさちの夫婦喧嘩の様子もくわしく記されている。三

月十六日、

一、今日、自飯田町江参候ニ付、倉太郎同道せざる所、留主中やかましく困り候様子、自婦宅之節、おさち叱りこらし、倉太郎泣わめき、自婦宅早々、出ける汗をぬくひもあへず、倉太郎を抱きすかし、ねむけつき候や、其儘睡り、然ども蚤其身まつはり居、睡りかね、多く睡らず、無程起出ル。然る所、吉之助、おさち等何やら怒り口論致、今日自留主中、倉太郎やかましく申所、なだめなくさへがせて叱りこらし候ゆへ、東西を不知四歳の小児、益泣きけぶのミ。其口論いかにと尋候所、右は去五日、吉之助、赤坂丸や久四郎方へ参り候節、折からおつぎ傘此方へ参り候を、吉之助さして行んと云しを自とゞめ候所、今日、自六番丁村田氏の晴雨傘借用して飯田町江参り候事、吉之助甚しく怒り候よし。^(二三)

その上、今日、吉之助が出かける所へ倉太郎がむずかり、出かけそびれたので、なおまた心よからず思い、殊の外立腹の様子である。物事が「いすかの嘴」のようになり行くところ、世間一同のことなのを、己が思うままにならず、かつまた養母の致し方が気に入らぬとて、家内の者、東西を知らぬ奴小児に当たり散らし、口論のうちに、おさちは「手廻りかね候ニ付、子守でも置き給へ」といったところ、吉之助の答に、「子守の一疋や二疋何かあらん。其代我身の随意ニ行ふべし」といったのは心得難い。

何故ならば、子守一人のみか二人まで召抱えている力では、どうして養家の難儀を救わないのか。力次郎が生まれてから今日まで百時になるのに、どうして自分の子のことでありながら、宮参り、赤剛飯をし、その上神参りをさせないのか。その身が不自由して、傘一本買求

めたか。これらのことを一向弁えずに、右の一言は戯れにいったことなのか。または心からいったことなのか。日を改めて尋ねてみよう。

此後にもかゝる誤ちあるべし。其度毎におさち、倉太郎等にあたり候様なる事にてハ、我身老後ニ及、甚敷心配、是迄数年心配致来り、此後は心易かれと思しものを、かゝる一事出合事、婢娘ニ心をかね年月を送り候事出来かね候間、異日吉之助心得を承り取斗ふべし。(同十六日)

また五月の中旬、吉之助が調練に着用の野半天の袖の仕立直しをめぐつての諍いもある。お路は近くの金毘羅参りに出かけようとしていたが、

余りの事ニ拝見を止め、制之、おさち仕立出来ざるよし答候ハ、宜しからず候へども、姉ニ仕立頼まんと云ハ甚しき言也。入用之節迄ニ間ニ合可申由申置候を、もどかしくや思ひ候半。母親妻も持作、針仕事他処出さん、甚敷心得違也。此故ニ、自倉太郎平臥の上、蚊帳の内五燈火を入、右半てん仕立直し遣ス。終日寸暇無之老母ニ、蚤蚊之多時節、夜職為致、出来畢候半てんを着用、姉輩の小袴着用致、自分立腹致、鉄砲稽古ニ罷出候方立派に候也。又、平半てんにて其儘出候て、内を納め、老母、妻子の心を易致方、何れか見事ならんや。心ある人間ふべし。

吉之助、近頃は癩症募り、我儘も同様、近日、村田氏「姉嬢」夫婦ニ申聞かせ、示教を頼むべし。異日心得を聞べし。

是迄度々夫婦口論度々なれども、先々おさち我儘ゆへと、おさちを叱懲し、或は示教致置候べども、当三月十六日、又今晚の始末、甚心得がたく被存候ニ付、こゝに記置候。(同十九日)

吉之助の内職は、その後煙草の仕掛切りにかわり、道具を買いこみ、

仕事場も作つた。また、倉太郎と力次郎の健康のために、人に頼んで幸神へ願つて、幸次郎、力三郎と改名した(六月十二日)。

八月二十五日、大暴風雨に見舞われ、玄関の壁落ち、門板塀倒れ、物置の潰れる被害にあつた。母屋の潰れた同心の家さへある。

九月に入り、四日の晩方、お路の胸痛甚しく、吐気がする。嘉七の診断では全くの時候当りであるという。

十月十二日、

自、綿入、昨今張畢候間、今晚縫かゝり候へども、幸次郎度々目をさまし候ニ付、やうやく表を仕立候のミにて、子ノ刻ニ成候ニ付、跡は枕ニつく。当年は力三郎有之候ニ付、仕立物間ニ不合、自綿入未出来不致。今以袷衣、寒さニたへかね候へども、寸暇なく、五十一才ニ成候て、かく迄なん義致候事、実ニたんそく限りなし。誠ニ薄命の者と憐むべし。然ども、さいわいニおつぎあり。彼は少しく孝行の心ざしあり。母親を思うこと篤かり。折々物を贈りて親を助け、并ニ妹姪杯へ小切をおくり、どふ着杯の料ニせよとて度々おくりこし候事、是にて心なぐさめ候也。

おつぎの夫弥兵衛も、町内家主の集りで酩酊して大いに醜態を演じ、家に送り帰され、たしなめるおつぎに悪口暴言を吐く。

十一月一日

三十余才に成、うわきに世を渡り、実に行末心もとなく存候事也。平日行あしく候間、三十余才に成、頭も冗候ニ、慎ミ候様おつぎ申候へバ、弥兵衛答て、我は五十、六十、七八十二至り候ても如此。この行ひハ止がたし杯申候由。誠ニ言語同断のしれ者也。

七 その死

安政四年の路女日記は欠けていない。飛んで安政五年（一八五八）になる。

四月二日、立春後十三日目、ほととぎすの初音をきく。翌々五日に幸次郎の袴着を祝う。五月の半ば頃よりお路の体調すぐれず、半起半臥をくり返す。「自ちのみち兎角同様、半起半臥也」（二十日）。「自眠気、両三日別而宜しからず、気分も一入塞ぎ、甚難義也」（六月二十一日）。

そんな中で飯田橋から四谷へ来て逗留するおつぎに吉之助は腹を立てる。

都て片腹痛きことどもなれども、わが子へもおつぎへ対し、たま／＼一ヶ年ニ一度参り候くらの客なるに、物事あらけだち候ても不宜候ニ付、先其儘おつぎを送り帰し、今日、吉之助心得の所可承存候へども、爰元ニて右様承るといへども、此節弥太郎殿日々参り被居候所、彼のものニ聞れ候も甚しき可恥存候ニ付、……

（六月二十二日）

と母親のお路は種々に心をくだく。また去る二月に吉之助は弥兵衛から金子一兩を借りながら未だに返していない。さらに色々のことがあつて、

男子ニ有まじき行、女子といへどもかく迄ニハ有べからずと、只々嘆息の外なし。吉之助当廿五歳、幸次郎、力三郎兩人の親戚に今少し貫メを付度物也。余り軽々しき事ども也。（同日）

六月の半ば過ぎより、お路とおさち母子は暑気あたりで二人揃つて

半起半臥の状態となり、例によって嘉七の診脈を受け、幸次郎を薬取りにやる。七月に入つてもお路の左の肩が痛み、熱もある。そんな中で、書物の虫干しやら、梅干し、七夕の祝儀、盆供養も定例のごとくにすませた。一方、また眼病もすすんだ。

八月のはじめ、飯田町へ行つて泊つた時には梅干しの種子が咽喉へつまつて危うかったが、榊原という医師を招き、また水天宮のお守札を頂戴して、漸く種子を吐き出すことができ、五日に有馬邸の水天宮にお礼参りをした。

八月八日、將軍家定の死去が報ぜられる。実は「七月六日申刻、御逝去の由也。御歳御三十五に成らせられ、恐れながら惜しみ奉り候事限りなし」。

この頃江戸市中に悪疫虎列刺が流行した。

壮健にてありし人心地あしく覚え候へバ水瀉いたし、其上腹内はり、大瀉の上、一日か二日の内死去致し候もの、六月廿七日頃赤坂辺多く候所、此節所々の多く損し、一同おそれ用心致事、右咒、京都参り候火にて、出入りの敷居ニ灸子致候へハ、右病難のがれ候由……。 （八月八日）

とて、足駄へ袋艾をし、門口へ八手の葉一枚、赤紙一枚、杉の葉、唐辛子を釣れば悪病を逃れるという。また別の咒もあり、巷の騒然としておののいている様子がうかがわれる。

同十四日、近隣の同心川井亥三郎、南条弥太郎老母が死んだ。

此節時候甚あしく、朝綿入衣ニても寒くおぼえ、昼後ニ至り候へバ、帷衣ニても尚暑し、七月中旬人々多損候事、此方門前すら一日ニ五ッ六ッ送葬を見候事也。又、両三日以前、鮫橋辺の井戸へ何やら投入れ候ニ付、其水飲候もの忽死し、此故ニ井戸替致候

事所々也と、野菜売惣吉話也。

お路の様体はこの日の夜八つ時(午前二時頃)より急変する。そしてこれ以後の日記はおさちが綴っている。木村氏の「滝沢路女日記」の解説にも「歿四日前同月十三日まででは自筆だったが、そのあたりの行文筆意に何の乱れもない」と書かれている。門番嘉七が往診して泊ってくれ、十五日の夕刻には飯田町のおつぎも駆けつけた。

十六日夜は甚だ病状悪く、まことに苦痛甚だしく、十七日朝四つ時(十時頃)ついに息を引きとった。太陽暦でいえば、九月二十三日に当る。享年五十三歳。

十八日、組合の同心達も代る代るに来て通夜、十九日に葬礼のところで友引のために延期、その騒ぎの中に力三郎は引付けをおこした。

大きにおどろき、いろ／＼手あて致候所、よほどむづかしく、大きに皆々おどろき、早々嘉七に見せ候所、よほどむづかしく申候てもなき為と皆思ひ候也。

二十日に葬儀、料理は七十人前を用意している。戒名を操誉順節路霜大姉という。

おさちが書きついだこの年の日記は、十二月十四日の途中までが残っているが、あとは欠けてない。また翌年以後のものはついに伝わらない。その後のことは、深光寺の過去帳を繰って辿ってみると、翌々年の万延元年(一八六〇)八月二十一日、おつぎの子の録之助が死去。その生まれは日記の欠けている安政四年と思われるから、享年は四歳であろう。戒名は顯照童子。また「思ひ出の記」の橘の生まれたはこの年の十二月一日である。

さらに二年後の文久二年(一八六二)四月十四日には幸次郎が十歳で死んだ。戒名を了幻童子という。

おさちの夫吉之助は、維新後は横浜の税関に勤めたという。その後離婚して家を出たが、なお滝沢姓を名乗り、てるなる女性と再婚、一女を設けたが、明治二十年(一八八七)九月十二日、五十五歳で没し、滝沢家で深光寺に葬った。力三郎は父に連れ去られて後に村田家へ入夫したというが、その後の消息は不明である。

四谷滝沢家の正系はここで絶え、飯田町へ養女となって行ったつぎの後裔は、橘の孫七代宏行氏が埼玉県飯能市におられたが、昭和六十年八月没、母堂の秀刀自は昨六十三年十一月に九十五歳で逝かれた。一女は嫁いで他姓を称し、滝沢姓は宏行夫人精さんと、宏行氏の妹智恵さんの二人のみである。

注

一 再版の昭和六十年刊の四六版本では、第十冊、二二頁五行目中程。
二 『小説神髓』二巻(明治十九年 松月堂)―『逍遙選集』第一二巻所収)

三 「失明当時の馬琴と其の家族の暗雲」(「改造」大正八年三月―『逍遙選集』第十二巻所収)

四 饗庭皇郎編『馬琴日記抄』明治四十四年 文会堂。

五 国立劇場第二十二回、昭和四十四年三月歌舞伎公演『南總里見八犬伝』

六 昭和五十三年五月十三日(土)講演、「馬琴の人と文学」(「ビブリア」七〇号 昭和五十三年十月)

七 「影印」(「近世文芸叢刊」九・十 昭和四十四年 同刊行会)、(翻刻)(木村三四吾編校。昭和六十二年 八木書店)

八 『曲亭遺稿』(明治四十四年 国書刊行会)
九 『馬琴日記抄』(前出)

- 一〇 木村三四吾編校『馬琴書翰集』翻刻篇』（「天理図書館善本叢書」五三
昭和五十五年）一の二〇に影印、二の一二に翻刻。
- 一一『吾仏乃記』巻四、百七六「建_レ解が壽藏及到岸墓石深光寺合表略
説、并に三たび蔵書沽却の損益。
- 一二 暉駿康隆等編校『馬琴日記』昭和四十五年 中央公論社。
- 一三 木村三四吾編校『滝沢路女日記』嘉永二年六月―八月』（「ビブリア」
九一号 昭和六十三年十月）
- 一四「大阪松蔭女子大学国文学会報」二一（「樟落葉」『餘二稿九』昭和六
十二年所収）
- 一五「路女日記」第一冊。
- 一六 木村三四吾編「橘女思ひ出の記」業餘稿叢十九（「ビブリア」六一
号 昭和五十年十月（『業餘稿叢』餘二稿四 昭和五十一年所収）
- 一七「路女日記」第二冊。
- 一八「同」第三冊。
- 一九「同」第四冊。
- 二〇「同」第六冊。
- 二一「同」第七冊。
- 二二「同」第八冊。
- 二三「同」第九冊。
- 二四「同」第十冊。